＝　春は来る　＝

２月６日に発生したトルコとその隣国シリアの大地震。時が経つにつれて被害状況が明らかになってきた。数えきれない建物の崩壊によって、５万人を超える死者、流れる映像は28年前、そして12年前の光景とダブる。

１月の阪神淡路大震災、東日本大震災は３月、そして２月の今回。がれきに積もった雪、その周辺で焚火をしながら暖をとり、家族の生存を願う人々、まさに身も心も凍る寒さの中で恐怖と不安に押しつぶされそうな悲壮な姿をまたしても目の当たりにした。

世界各国から、支援物資をはじめ、医療チームも含めた救援隊の派遣が行われている、被災された方々の一刻も早い救援を願ってやまない。その一方で、耐震設計条件を満たしていない建物が今回の地震で莫大な人命被害を出すことになったという指摘がある。私たちは先の大地震以降、防災・減災を官民挙げて進めてきたが、家屋の耐震強度やインフラ含め、あらためて我がごととして捉えておかなければならない。

そんな中、２月７日に大臣・省庁要請の一環として復興大臣へ要請を行ってきた。被災地域の生活インフラの復旧はほぼ完了し、防災集団移転や災害公営住宅の建設などハード面での復興は着実に進んでいるが、住民が震災前の生活を取り戻すための生活や雇用の問題、心のケアやコミュニティの再生といったソフト面、そして風評被害など、克服しなければならない課題は数多い。現状を直視しながら引き続きの努力を…、私たち労働組合も社会の一員として取り組んでいく所存…云々と。

そして、もう間もなく、あの３月11日を迎える。あれから12年。無念と悲しみのうちに亡くなった15,900人（余震での犠牲者含；2021年３月時点）の十三回忌に当たる。宗派によって少し意味合いは違うが、十三回忌は故人が亡くなってから12年後の命日（13年目の命日）に行う年忌法要である。仏教では故人が仏様の中でも中心的存在である、「大日如来」と出会う重要な日という教えがある。故人を偲び供養を行い、天上の世界で穏やかに過ごすことを家族や親族が集まって祈るもの。

その12年、被災当時、小学校低学年だった子供たちは成人に、被災と時を同じくして生まれた赤ちゃんは中学生になろうとしている。

何度か紹介した閑吟集のうた、「思い出すとは忘るるか　思い出さずや忘れねば」、忘れねば思い出すことはない。そう考えれば短くも長い12年、生きろと与えられた命、そして授けられた新たな命は、寂しさと苦労の中で、亡き人を想いながら、生活と被災地の再生に向けて懸命に努力を続けてきた。

それは、コロナ禍の３年間、懸命に頑張った子供達や受験生にもいえること。某進学塾の広告が見事に言い得て妙。

“かつてない、その試練が　きっと君たちの一生の力になる”

『マスクを着けて、教室へ向かった日々。制限された環境で、学んだ日々。それは、かつてない３年間、試練の日々でした。それでも、あきらめず机に向かい続ける姿に、これ以上がんばれって言えないほど君たちはがんばった。

私たちのほうが、どんなに勇気づけられているか、君たちは気づいているだろうか。心配も焦りもすべてバネにして、乗り越えたんだ。君たちはもう、自分のために、闘える。正々堂々と、勝ちに行け。』

“ＨＥＲＯ　桜より先に、咲いてやろう”

多くの試練とそれに立ち向かう姿は、職場第一線で働く仲間たちにも通ずる。ＡＰ２３春季取り組みも大詰め。　みんなにきっと、春は来る。

ご安全に

2023年３月１日

日本基幹産業労働組合連合会
中央執行委員長　神田 健一